岐阜市立女子短期大学研究紀要第 65 輯（平成 28 年 3 月）

沖縄・伊良部島佐良浜の宗教職能者

祭司とシャーマンとの関係について

Religious Practitioners in Sarahama, Okinawa
-The Relation Between Priest and Shaman-

川上新二
Shinji KAWAKAMI

Abstract

Religious practitioners in Okinawa are divided into two types, priest and shaman. Noro (or Tukasa) who perform rituals for community is regarded as a priest, Yuta (or Kankakarya) who meet personal demands is regarded as a shaman. Some scholars consider that Noro and Yuta didn't separate into priest and shaman in early days, and they played a role as priest as well as shaman. This article will attempt to study the relation between priest and shaman through some research on religious practitioners in Sarahama, Okinawa.

Keywords : 沖縄・伊良部島佐良浜、祭司（プリースト）、シャーマン、ツカサンマ、カカランマ

１．はじめに

宗教職能者は超自然的存在（霊的存在）とのかかわり方から、祭司（プリースト）とシャーマンとに分類される。 前者は神霊などを祀る行為をするのみで､それらに憑依されることはなく、神霊との直接交流は行なわないのに対して、後者は神霊によって憑依され、それらと直接交流するとされる。沖縄で活動する民間宗教職能者には、ノロやツカサという名称で代表される女性宗教者と、ユタやカンカカリャという名称で代表される女性宗教者がいる。前者はウタキ（御嶽。地域の祭祀の中心をなす神を祀ってある聖地）で行なわれる、いわば公的な祭祀を担当する祭司であり、後者は占いなどの個人的な依頼事に応じるシャーマンとされる〔佐々木 1980:128-149;1984:240-243〕。

このノロ（またはツカサ）とユタ（またはカンカカリャ）との関係について、櫻井徳太郎は以下のように指摘している。ノロなどは神への祭祀を行なう者としてカミンチュ（神女）や神役ともよばれるが、カミンチュにはノロ以外に、地位としてはノロの下におかれる「下級のカミンチュ」もいる。沖縄本島の久高島、宮古群島の伊良部島佐良浜、八重山群島の石垣島白保などでは､「下級のカミンチュ」がノロとともにウタキの祭祀に参加する一方、神がかり（神霊による憑依）を経験し、沖縄本島でユタが行なうような個人的な依頼事にも応じている。

櫻井は、このような「下級のカミンチュ」が神霊によって憑依され、地域社会の公的な祭祀のみならず、個人的な依頼事にもかかわっていることを証拠として、現在では祭司としてのノロやツカサと、シャーマンとしてのユタやカンカカリャとは、異なる役割を果たす別個の宗教者とみなされているが、初期の段階では祭司として地域社会の祭祀を担当する者と、シャーマンとして個人的な依頼事に応じる者とは未分化であって、宗教者の専門化は進んでおらず､重なり合い融合していた。その後、次第に専担化が進み、両者の領域が分化してきた。この時点で宗教者は、地域社会の祭祀を担当する祭司と、個人的な依頼に応じるシャーマンとに分化したが、両者には交叉する部分も残っていた。さらに琉球の第二王朝尚真王のとき、聞得大君を最高位とする女性宗教者の中央集権的統括機構が定められると、各地のウタキの祭祀を担当する女性宗教者も王朝の統制下に取り込まれ、神がかりをともなうシャーマン性を形骸化してしまった、と指摘する〔櫻井 1987:195-230〕。

これに対して赤嶺政信は、櫻井が「下級のカミンチュ」の例としてとりあげている久高島のウムリングァについて､「シャーマン的資質を有し、個々の家レベルにおいてシャーマン的職能を担う一方で、村落祭祀にも関与して」おり、4 月と 9 月に行われるニライカナイ（東方海上にあるとされる楽土）から来訪する神を祀る祭事では主役的役割を果たし、ウムリングァよりも上位のカミンチュであるノロなどは､「座してこの神遊びを観覧するという消極的役割しか担っていない」と述べる一方、次のようにも指摘している。「久高島のウムリングァは、「下級神女のシャーマン性」の典型的な事例だが、（中略）ある特定の神役のみがシャーマン的であることが期待されていて、そのシャ

ーマン的神役が特定の祭祀で特定の役割を果たす。換言すれば、祭司とシャーマンの祭祀場面における役割分担があるということであり、この事実こそ重要だと考えられる。宮古の諸村落でも、シャーマン的職能者が神役組織の一員になっていたが、そこにも祭司としてのツカサとの役割分担があったことの可能性を想定すべきであろう。しからば、祭祀の場における祭司とシャーマンとの間の役割分担という問題をどのように考察すべきかが、次の問題になろう」と述べる〔赤嶺 1997:154-156〕。

そして赤嶺は、「シャーマン的職能者が祭祀組織に組み込まれている久高島や宮古の状況に対しては、個々の位置や役割を、祭祀の内容や儀礼過程の脈絡の中で、あるいは他の祭司との関係において把握することが重要で、その上で相互の事例の比較研究をすることが、ノロとユタの相関に関する問題にとって実りある成果を期待できると思われる」と提言する〔赤嶺 1997:156-157〕。

本稿では、櫻井がノロ（もしくはツカサ）とユタ（もしくはカンカカリャ）との関係を考察する際に事例としてとりあげた伊良部島佐良浜における民間宗教職能者の状況について、筆者が聞き取り調査した内容を報告し、佐良浜におけるさまざまな民間宗教職能者の関係について若干の検討を加えることとする。

２．社会組織

先ずは、民間宗教職能者が活動する伊良部島佐良浜の社会組織について報告する。

地域社会を示す言葉にシマがある。シマという語は伊良部島全体を指すこともあれば、佐良浜を指すこともあり、話の文脈によって異なる。

佐良浜の住民は、モトムラもしくはナカムラとよばれる、どちらかのムトに所属している。ムトとは「祭祀儀礼集団で、昔は同一祖先をもつ同一血族であったものと思われる」という〔伊良部村役場 1978:1402〕。佐良浜には池間添と前里添という 2 つの行政区域があるが、池間添にも前里添にも、それぞれモトムラ、ナカムラの人が住んでいる。モトムラ、ナカムラというムトの由来は次のようである。

1305 年、マジャ 3 兄弟とその一族が久米島から池間島に移住したが、池間島ではマジャ 3 兄弟とその一族を祖先とする者はモトムラとなり、祖先がマジャ 3 兄弟とその一族ではない者はナカムラとなった。

その後、池間島からさらに伊良部島佐良浜に人々が移ってきたが〔伊良部村役場 1978:1292〕、モトムラ、ナカムラというムトもそのまま伝えられた。佐良浜にはムトの墓（ムトバカ）もある。モトムラはさらにマジャムト、マイヌヤームト、アギマスムトの 3 つに分かれる。これはマジャ 3 兄弟のうちの誰を祖先とするかによるものであり、なかでも長男の系統であるマジャムトが最も権威を有するとみなされている。

ムトにはそれぞれ拝所がある。モトムラのうちマジャムトの拝所は前里添佐那浜 1-2 洌鎌家の、マイヌヤームトの拝所は前里添佐那浜 1-3 喜久川家の、アギマスムトの拝所は前里添佐那浜 1-4 西銘家（現在空家）の、それぞれ寅卯の方にある小さな祠で、そのなかに石が置かれてある〔平良市史編纂委員会 1994:587〕。一方、ナカムラの拝所は前里添 44 番地（伊良部町役場佐良浜支所の西側の広場）にあり、建物のなかに石が置かれてある〔平良市史編纂委員会 1994:590〕。

旧暦 9 月の甲午の日から 4 日間、佐良浜の老若男女をあげてミャークヅツとよばれる祭りが盛大に行なわれる〔伊良部村役場 1978:1402〕。このとき、モトムラでは 47 歳以上の男が、ナカムラでは 50 歳以上の男が、各自所属するそれぞれのムトの拝所に集まって祭事を行なう。拝所に集まる男たちはウヤとよばれる。各ムトの拝所で祭事を行なった後、モトムラのウヤたちは、前里添 4 番地伊良部町役場佐良浜支所の前にある広場に集まる。ナカムラのウヤたちは、祭事を行なったナカムラの拝所にそのまま集まっている。

佐良浜全体にかかわる祭事を担当する女性宗教者はツカサンマとよばれ、夫がモトムラに所属する女性のなかから 3 名、夫がナカムラに所属する女性のなかから 3 名が、それぞれ選ばれる [1]。ミャークヅツでは、ツカサンマたちは先ず、大主御嶽（伊良部島における最高位のウタキ。ナナムイともよばれる）での神ニガイ（願い、祈願）を行なう。その後、モトムラから選ばれたツカサンマたちはマジャムトの拝所で、ナカムラから選ばれたツカサンマたちはナカムラの拝所で、それぞれ神ニガイをする。それを終えると、モトムラから選ばれたツカサンマが、モトムラの人々が集まっている場所で唄いだす。続いてナカムラから選ばれたツカサンマも、ナカムラの人々が集まっている場所で唄いはじめる。午後 3 時か 4 時ころツカサンマが唄いだすと、ウヤたちに、ウヤ以外のモトムラ、ナカムラに所属する人々も加わって踊りがはじまる。人々はモトムラとナカムラに分かれてそれぞれ踊るが、モトムラのツカサンマが唄いださなければ、ナカムラのツカサンマは唄ってはならない。モトムラではマジャムトが中心となって踊る。

ミャークヅツではモトムラ側でもナカムラ側でも、ツカサンマ、アネンマ（ツカサンマの任期を終えた女性）、一般の女性たちの順に列をなし、輪になって歌い踊る。女性たちは夫が所属するムトの方の輪に加わる。女性たちの後方に新しくウヤになった男性が続き、その後ろにその他の男性が続く。新しくウヤになった男性たちの先頭には、マジャムトのツカサウヤが入る。

[1] 茂木によれば、ツカサンマに選ばれる女性の出生地は問わないという〔茂木 2014:17〕。

ツカサウヤは2周ぐらい踊って輪から抜ける。踊りは午後7時半ころまで続く。

マジャムト、マイヌヤームト、アギマスムトにはそれぞれツカサウヤ（男性）がいて、モトムラを仕切っており、またナカムラにはナカムラのツカサウヤがいて、ナカムラを仕切っている。ツカサウヤは、ツカサンマとともに各種ニガイの日取りを決める。ツカサウヤのもとには会計を担当する者がいる。長男の系統であるマジャムトの会計係は、ミャークヅツを取り仕切り、祭りにかかる費用を各家から集める。集めた金銭は毎年余る。余りは次の年に繰り越しされる。ツカサンマへの手間賃も集めた金銭から出す。

現在ではツカサウヤといえばムトのツカサウヤのことであるが、昔は佐良浜のツカサウヤがいて、フヅカサともよばれた。佐良浜のツカサウヤは佐良浜のすべての事柄にかかわり、権限があって、何をしても許された。

佐良浜の人々は、自分がどのムトに所属しているのか知っている。両親が子供に、どのムトに所属しているのか教える。子供が生まれて3日目に、父親が自分の所属するムトに行って子供の誕生を報告する。ミャークヅツの中日（2日目）に、マスムイと称して、その年に生まれた子供（男女とも）をムトに登録する。ムトには登録者の帳面がある。マスムイでは、男児も女児も父親のムトに登録する。その一方で、「母の実家はアーグル（栗のお握り）、父の実家はイスグル（石を投げる）」といわれるように、子供にとっては母の実家の方が親しみのある存在とされた。

佐良浜生まれの女性と佐良浜以外の生まれの男性との間の子供は、母親のムトに所属する。話者A（男性、昭和28年生。マジャムトに所属する）の同級生であった人は、母が佐良浜の女性、父は戦災孤児で熊本から伊良部島に連れてこられた男性であったが、彼は母親のムトに所属していた。

結婚した女性にとって日常生活においては、ツカサンマを選ぶときには自分が所属するムトではなく、夫が所属するムトの者として選ばれたり、ミャークヅツのときには夫が所属するムトの側の輪に加わって踊ったりするなど、自分のムトよりも夫のムトの方が大切である。

現在（平成27年）、池間添の区長はナカムラ、前里添の区長はモトムラ所属の人（男）である。現在80歳以上の人はムトの区別意識が強く、モトムラがナカムラよりも上位と考えている。4代を経た者は他のムト（モトムラの者はナカムラに、ナカムラの者はモトムラに）に移ってもよいとされている。

３．民間宗教職能者

（1）ツカサンマ

佐良浜全体にかかわる祭事を担当するのは、ツカサンマとよばれる女性宗教者である。佐良浜のツカサンマは6名で、内訳はウンマ（ウフンマともよばれる）2名、カカランマ2名、ナカンマ2名である。位はウンマが一番上であるが、神に関する歌を唄うカカランマが祭事で最も重要な役割を果たす。ナカンマはウンマを補佐する。

ツカサンマは、その夫がモトムラかナカムラに所属する47歳から57歳までの女性のなかから選ぶ。夫がモトムラに所属する女性のなかから3人のツカサンマ（ウンマ、カカランマ、ナカンマを1人ずつ）を、夫がナカムラに所属する女性のなかから3人のツカサンマ（ウンマ、カカランマ、ナカンマを1人ずつ）を選ぶ。昔は50歳以上の人、他所から嫁入りしてきた人、公務員、身体の不自由な人、離婚した人などは除いていたが、最近では独身者以外、そのような人も含めて選んでいる。

10月もしくは11月に区長の家で、区長がクジでツカサンマを選ぶ[2]。ツカサンマの任期は3年である。ツカサンマを選ぶ方法は『伊良部村史』によれば、伊良部島の他地域と同様であるという。同書には、伊良部島伊良部での選出方法として、「村内に住む全女性の名前を1人ずつ紙切れに書いて、お盆にのせ、3、5、7回と揺する。揺すって落ちた数の多い者から選ぶことにする」とある〔伊良部村役場 1978:1261〕[3]。選出されると、ツカサンマに選ばれた者の家に報告が来る。

カカランマは神に関する歌を唄うが、歌には神歌11種と、オヨシとよばれる歌12種がある。このうちオヨシは一般人には聞かせないものである。ナカムラのカカランマを務めたことのある話者Bは、次のように語っている。

> 自分がカカランマになることが決まり、アネンマ（先輩のツカサンマ）から、歌を覚えるようにいわれて本を見せられたが、歌の多さに驚いた。正月に家々をまわるときに唄う歌など、1年に1回しか唄わないものは覚えられず、忘れてしまう。祭事が近づいたら一生懸命覚え、終わると忘れる。
>
> オヨシは一般の人には聞かせない。神への祭りをしているときに唄うので、一般の人は聞くことができない。しかしムトの拝所でそれぞれの祖先を祭るときには、唄う声が響くので、外にいる人にも聞こえる。
>
> オヨシを唄っていると、唄っている声が自分の声でなくなることがある。祖先が自ら唄っているのだと思う。最初は自

[2] 茂木によれば、クジはンマユイといい、モトムラでは池間添の、ナカムラでは前里添の、ブーンミャーとよばれるかつての番所（現在は集会所）で行なわれるという〔茂木 2014:17〕。

[3] 茂木によれば、佐良浜では「紙に世帯主（妻ではない）の名前を書いて小さく畳み、盆にのせる。盆を揺すって紙が落ちると名前を確認して戻し、また落とすことを繰り返して、3回落ちたものから順に、ウフンマ、ナカンマ、カカランマの3人が選ばれる」という〔茂木 2014:17〕。

分の声だが、しばらくして気がぼんやりしてくると、自分の声ではない声で唄っているのがわかる。オヨシを捧げている家の祖先が唄っているのだとわかる。

このように、祭事で唄う歌は先輩のカカランマから教わる。ツカサンマの任期3年を務めた後、クライアガリ（位上がり）したカカランマが次の3年間、新しいカカランマに歌を教える。一日中歌の練習をするときもある。

大主御嶽の掃除やそこに生えている木の伐採はウンマやナカンマが行ない、カカランマは行なわない。神ニガイをしてから大主御嶽の掃除や木の伐採をするが、カカランマは、神に歌を捧げながら神とかかわる存在であり、手を汚したりしてはいけないためである。

ツカサンマが担当する祭事は、『伊良部村史』によれば年間60あり〔伊良部村役場1978:1239-1245〕、カカランマは多くの歌を覚えなければならない。そのため、人々はカカランマに選ばれるのをとりわけ嫌がる。平成24年に、次の年からの新しいツカサンマを選ぶ予定であったが、選ばれた人が引き受けることを承知しなかったので、それ以降ツカサンマは空席となっていた。平成26年に、前回選ばれるべき者の任期3年のうちの残り1年を引き継ぐ形でツカサンマが選ばれた。しかし任期1年では期間が短く、カカランマは歌を覚えられないであろう。

任期が終了した前任のツカサンマたちのために行なうクライアガリノニガイ（位上がりの願い）は未だ行なわれていない。また、正月に行なわれる年初めのニガイが実施されなければ、そのほかの1年間の行事も行なわれない。今年（平成27年）も正月初めのニガイが行なわれなかったので、ユークイなど年間の行事も行なわれない見込みである。

ユークイとは、旧暦9月に行なわれる豊穣や幸福を願う祭事である。佐良浜では47歳から57歳までの女性はユークインマとよばれ、この祭事に参加することができる。47歳から57歳までならば何歳からでも参加できるが、一度参加すると57歳まで毎年参加する。参加するユークインマたちは、ツカサンマとともにユークイの前日、大主御嶽に集まって祭事を行なった後、大主御嶽に籠もる。翌日、ツカサンマとユークインマたちは大主御嶽を出て、仲間御嶽、アウズマイ、ウジャキニー、ウイラ（ウイラニー）、マミヌヌス（アカマミー）、大和神（ヤマトガンウヤー）、ヒャーズの神（佐良浜比屋地）、ナツヴァ（ナッヴァニー）の順序で各拝所を巡ってニガイをする〔伊良部村役場1978:1311-1313;平良市史編纂委員会1994:581-598〕。

昔（1970年代はじめ頃）は、ツカサンマになると米などがもらえたため、ツカサンマは裕福であった。祭事に供えられたもの（米、塩、タバコなど）は祭事の後、ツカサンマがもらった。祭事のときには、ツカサンマが指定した店から線香、米などを買ったので、ツカサンマには経済的な権限もあったといえる。このように昔はツカサンマになると、米、塩、供物、酒などをもらえたので、生活が楽になった。

以前、ツカサンマには、自動車に乗ってはならない、宮古島の平良に渡ってはならない、裸足で歩かなければならない、などの決まりがあった。人々はツカサンマの持ちものに手を触れてはならず、触れたら、神ニガイをしなければならなかった。ミャークヅツのときも、一般の人はツカサンマの持ちものに手を触れてはならず、触れると、酒を買ってきてムトの神に供えなければならないとされた。また、人々はツカサンマが来ると、道をよけて隠れたりもした。各ツカサンマには、介添えとしてユームチケ（ユームチツ）という者が1人ずつ付いた。

現在では、ツカサンマに選ばれる年齢の女性は、自分の子供が高校、大学に行く時期に当たり、ツカサンマに選ばれると行なうべき祭事も多く、一般の人と同じように家庭生活を営むことが難しくなるので、ツカサンマになることを嫌がる。ツカサンマにそれなりの報酬を与えようという話もあったが、うまくいっていない。次のツカサンマを来年（平成28年）の旧正月に選ぶことになっている。

（2）ダツンマ

佐良浜にはサト（里）とよばれる小規模な地域集団があり、住民は必ずといっていいほど、いずれかのサトに所属している。サトは地域集団であるため、モトムラの者とナカムラの者とが同じサトのメンバーになる場合もある。サトは「男系或いは女系の一団となって生活している範囲」ともいわれるが〔伊良部村役場1978:140〕、血縁関係のない者が、その地域内で暮らすうちに自然とその地域のサトのメンバーに加わることもある。また、そのサトの区域内に住んでいない者でも、その者の祖先がそのサト出身である場合、祖先が所属していたサトにそのまま加わっていることもある。古い歴史のあるサトの住民のなかにはプライドの高い者もおり、メンバーのつながりが強いサトもある。

サトでは、サトに所属する住民の「安全と長寿、幸運を祈願する拝所として、里ガン（里の神）が祭られる。大方は岩の根元に砂を敷き、香炉を据えて、折々に、日を卜して里の人々が集まり、また、賽銭と塩、米、線香を出し合って、ダツンマ（管理し司祭する婦人）にニガイしてもらう」〔伊良部村役場1978:1245〕。

サトガンを祭る場所もウタキ（御嶽）とよばれる。したがってウタキとよばれる拝所には、ツカサンマが担当する佐良浜地域としての拝所と、ダツンマが担当するサトの住民の拝所（サトガン）がある。例えば、話者Aのサトガンはアラヤーフギス（アラヤーギス、池間添65番地）であり、またモトムラのカカランマを務めたことのある話者Cのサトガンはツツギス（前里添146番地）であるが、これらはサトガンのウタキである〔平

良市史編纂委員会 1994:581-598〕。

なお、サトガンを祭っていないサトもあり、またサトガンを祭っていても、その管理や司祭を引き継ぐ人がいなくなったら、掃除も行なわれなくなり、廃所となることもある。

サトガンを管理、司祭する女性はダツンマとよばれ、そのサトガンを祭るサトに所属する女性のなかから、サトのメンバーが相談して選ぶ。ダツンマは、ツカサンマに選ばれる年齢（47～57 歳）を過ぎた女性から選ぶべきであるが、最近では人が少ないので、年齢を繰り上げて 40 歳代の人がダツンマをするようになっている。任期は 3 年であるが、サトによって異なる。

サトガンのダツンマをしている者は、ツカサンマには選ばれない。また、ツカサンマをしている者やツカサンマをした者はダツンマにならない。ダツンマはツカサンマより位が下であるためである。ツカサンマ（カカランマ）が唄う歌のなかに、サトガンの神は入っていない。

（3）ムヌスンマ

ツカサンマのうち、カカランマはニガインマともよばれる。神へのニガイ（願い、祈願）をする女性はニガインマとよばれるが、カカランマは佐良浜の祭事を担当するので、いわば公式のニガインマである。サトガンを管理し、祈願するダツンマも、サトガンにニガイするのでニガインマである。いわば小規模な地域ごとのニガインマである。

カカランマ、ダツンマ以外にムヌスンマという女性もいる。カンニガイオバアともよばれる。カカランマは佐良浜の神ニガイを、ダツンマは小規模な地域の神であるサトガンへのニガイを担当するが、ムヌスンマ（カンニガイオバア）は個人的な神ニガイや各家での神ニガイを行なう。このような個人のための神ニガイをするムヌスンマも、ニガイをするのでニガインマである。

ムススンマには、占いなどの予言能力のある者と神ニガイをする者とがおり、その両方をする者もいる。ムヌスンマと同様に個人的なニガイを行なう男性は、ムヌスとよばれる。

ムヌスンマは神ニガイをすると、神の姿を見たり、神の声を聞いたりするという。神や祖先が自分の後ろにいたり、声をかけられたりもするという。マウカン（各人の守護神）となっている祖先が出てきたりもする。

神ニガイをするには唱えごとをしたり、歌を唄ったりしなければならず、唱えごとや歌を覚えていないムヌスンマは神ニガイができない。神ニガイをするムヌスンマのなかには、自分の考えで唱えごとをしたり、歌を間違って唄ったりする者も多い。唱える神の名前の順番を間違ったり、神の名前を省略したりする者もいる。

ムヌスンマは各家での神ニガイも行なうが、ある特定のムヌスンマを決めて、常にその者に神ニガイを行なってもらっている家もある。その家を担当する特定のムヌスンマを、その家のヤーダツという。ムヌスンマのなかには線香の燃え方を見て、その家の状況（家族の健康や災い）がわかる者もいる。どの方向から良いこと、悪いことがやってくると教えたりする。また、ニガイをする前に線香を立てるが、それがばらばらになってしまい、うまく立たないことがある。そのような場合、その家の祖先の誰かが、自分にもニガイをしてほしいと伝えてきているのであり、家のニガイが終わった後、その祖先のためにニガイをすると、線香はうまく立つ。

ヤーダツになるムヌスンマは、ほとんどがシマの人であるが、最近では、佐良浜以外の伊良部島に住むムヌスンマをヤーダツにして、神ニガイを依頼している家もある。

漁船のニガイ（航海安全や大漁の祈願）もムヌスンマが行なう。船の親方がムヌスンマに依頼する。

ムヌスンマは、死んだ人の魂が成仏するように願うタマスウカビ（タマスウカビニガイ）や、身体を離れた魂が戻ってくることを願うタマスツケ（タマスツケニガイ）なども行なう。話者 A は小学校 5、6 年生のとき、タマスツケを行なった経験がある。港の岸壁近くの海で溺れたことを誰にもいわなかったが、ムヌスンマに、いついつ、どこそこで溺れただろうといわれて驚き、ムヌスンマに当てられたので、タマスツケを行なった。

タマスウカビでは、ムヌスンマが死者の言い残したことを代弁する。高齢者が亡くなるとダビワーといって、豚を殺し、その豚の一部を「亡くなった人の足だよ」などといって人々に渡していた。ワーとは豚のことであるが、このようなことは伊良部島の他地域では行なわれず、佐良浜だけが行なっていた。高齢者が亡くなったときなどには、タマスウカビが行なわれた。普通のムヌスンマにはできず、死者の代弁ができるムヌスンマは、佐良浜には数人しかいない。

タマスウカビでは、ムヌスンマのおばあさんが線香を焚いて神ニガイをすると、最初は歌を唄っていて、途中から言葉になる。誰かと会話をしているようにしゃべりだす。誰かとやりとりしているようで、途中で泣いたりもする。30 分以上、1 時間ぐらい会話をしている。それが終わると、「何がほしい、何が足りないといっている」、「何々が心残りだ、誰々に感謝している、といっている」などと遺族に伝えてくれる。遺族しか知らないようなことを言い出す。

話者 A の祖母が亡くなったとき、死者の代弁を行なってもらった。ムヌスンマが歌を唄っているとき、ムスヌンマに手を触れてはならないということであった。唄っている途中からムヌスンマがしゃべりだした。「赤い帯留がない、といっている」という。家族は「みな揃えたはずだが」といいながらもタンスを開けてみたりしていると、タンスの後ろに帯留が落ちていた。ムヌスンマはまた、「作業着がない、ともいっている」という。家族が「全部出してある」といっても、「ない」という。そこで

探してみた。家の外に行って、スーパーの袋に包まれていたものを出してみると、作業着であったので、それを供えた。ムスヌンマはまた、「ネックレスがない、ともいっている」というので、いろいろなアクセサリーが入れたあった箱のなかから、1つ取り出して供えた。

Aの祖父が亡くなったときにも、ムヌスンマにタマスウカビを行なってもらったが、そのときには「天井裏にカバンが置いてあり、そのなかに郵便局の貯金証明書がある」ということであった。探してみると、天井裏に本当に革のカバンがあり、そのなかに200円の貯金証明書が入っていた。さらに、Aの長男が亡くなったとき、以前とは別のムヌスンマに行なってもらったが、うまくいかず、さらに別のムヌスンマにもう一度タマスウカビを行なってもらった。

Aによれば、「ムヌスンマのなかには、このようなタマスウカビができる者がいる。代々このようなことをしているおばあさんがいた。このおばさんの娘（現在60歳代）も、このようなことをしている。若いときからこのような気があった」ということである。

（4）ツカサンマとムヌスンマ（カンニガイオバア）

先述のようにツカサンマの唄う歌には、オヨシ（12種）と神歌がある。これら以外に、祭事に唄われる歌として神ニガイの歌がある。新築、米寿、古希、子供の誕生などのときに唄う祝いの歌であり、そのような祝いの場では神ニガイして、当人たちの健康や繁栄を祈る。また、位が上がった（進級や昇進）、病気が治ったなどのときにも、神への報告として神ニガイの歌を唄う。このような神ニガイの歌を唄って行なう個人のための神ニガイや家での神ニガイはムヌスンマ（カンニガイオバア）が行なうが、どのような場面で、どのような歌を唄うか、区別できないムヌスンマもいる。

神ニガイの歌は、ムヌスンマではない一般の人でも唄える。口伝えで皆が覚えていた。例えば、祝いの席に来た人たちは、その席で唄われる神ニガイの歌を聞いて覚えた。覚えた人は、祝いの席でムヌスンマ（カンニガイオバア）や他の人々と一緒に唄ったりした。現在でも80歳以上のおばあさんたちは皆、神ニガイの歌を知っている。

このように昔は一般の女性でも、ほとんどの者が神歌を唄うことができた。 ムヌスンマはもちろん、佐良浜の昔のオバアたちはみな、フツヨン（フツユン、唱えごと）もすることができた。年寄りたちも、日常的に唱えごとができた。Aによれば、30年くらい前、家をつくるとき、干支の順に神の名を唱えて新築ニガイをするおじいさんがいた。ムヌスではなく、普通のおじいさんであった。

そのような神ニガイの歌を唄う人のなかでも、神から与えられた力をもつ人がいる。ムヌスンマ（カンニガイオバア）は、神ニガイの歌を覚えた人がなるのではなく、神の力がある人がなる。そのような人は、これからのことを夢に見たり、出会った人の顔色からその人のこれからのことが思い浮かんだり感じたりする。ある家から線香の匂いがしてくるのを感じ、その後その家から死者が出た、などということもある。予言となる夢は、明け方に見るともいう。

このような神から与えられた力をもつムヌスンマ（カンニガイオバア）は、当人だけでなく、先祖代々神にかかわることをしてきた人々である。ツカサンマを選ぶのは、先述のようにクジであるが、なぜか必ず先祖にムヌスンマ（カンニガイオバア）やツカサンマをしていた人が選ばれる。

個人や家の神ニガイをするのはムヌスンマ（カンニガイオバア）であるが、ツカサアガリ（ツカサンマを引退した人）が依頼されて個人的なニガイをしたり、ヤーダツを務めたりすることもある。

ツカサンマのうち、カカランマはオヨシや神歌を唄うことを通じて神と交流するが、カカランマだけが神と交流するわけではない。ウンマとナカンマも、神と交流できる能力がある。しかしウンマはクライアガリの後、ムヌスンマ（カンニガイオバア）をしてはいけないという決まりがある。ウンマはツカサンマのなかでも最高位であるため、歌や唄えごとがわかっていても、ムヌスンマ（カンニガイオバア）をしてはいけない。ナカンマはムヌスンマ（カンニガイオバア）をしてもかまわない。

モトムラのカカランマを務めたことのある話者Cは、カカランマの任期を終えてインギョウ（引退）した後、フツユン（神願い）やヤーキ（家）の願いを行なっている。しかし、Cのサトガンはツツギスであるが、そのダツンマにはならない。ツカサンマを務めた者はダツンマにはならない。

Cは現在、2〜3軒の家でヤーキニガイ（家の願い）を行なっている。ヤーキニガイでは神を呼び出して願う。Cによれば、線香を燃やすには時間が必要で、45分くらい燃えている。線香の燃え方で、その家のことを悟る。線香が燃えている間は、その家でニガイをする。線香が燃え終わった後、20分くらいはその家で食事などの接待を受けるので、1 軒の家でのヤーキニガイには十分な時間が必要である。線香が燃えている途中で、ヤーキニガイを終わらせて帰ってしまうカンニガイオバア（ムヌスンマ）もいるが、自分は十分に時間をとって行なっている、ということである。

現在Cは、神ニガイの歌を覚えるため練習をしている。例えば、70歳や88歳の祝いの歌などを練習している。このような歌は、カカランマが歌うオヨシや神歌とは違うものである。

話者Aによれば、Cは将来タマスウカビも実施できる可能性があるという。Cの実家はAの家の隣であったが、Cの母親もカカランマを務め、ムヌスンマ（カンニガイオバア）もしていた。

Cは以前から、ツカサンマに選ばれる夢を見てきたという。次に行なわれるクジでは選ばれることのないよう神に願い、ツカサンマになることを延期してもらった。代わりにDが、年齢はCより下であったが、先にモトムラからのツカサンマ（カカランマ）に選ばれた。

Cは以前から、カラスが話している内容を聞くことができ、カラスが誰かの家をのぞき込んで話している声が聞こえてくることがある。また墓場で死者を見たり、次男の身体の調子がおもわしくなかったとき、夢に現れた人から、次男の不調を治すために遠い親戚に金を送るようにいわれたりした。さらには、ある場所で酒を注いだとき、その酒が血のように見えたことがあった。何かあると思っていたら、ある人が交通事故で死亡した。畑で作業をしていたとき、近隣の人が畑に立っている姿が映像のように見えたが、数日後、その人が死亡したということもあった。Cが畑の畔に坐っていると、死者が話しかけてゆくこともある。

また、Cはカカランマをインギョウしてから、東京で神歌などを唄って公演することになったが、それに行く前、自分が乗る車が他の車と車の間に飛び込んでいって事故になり、警官が2人来るという夢を見た。このような夢を見たので、公演に行きたくないと思ったが、すでに決まっていたことなので、仕方なく行った。すると公演のとき、舞台の脇、幕の後ろにあった穴に落ちた。病院で縫ってもらったが、その病院にはちょうど警官も来ていた。

Cのように生まれつき霊感があって、ある年齢になってから神の姿を見たり、神の声を聞いたりする人がいる。Cのように感じたことを口にして言葉で伝える人もいれば、口には出せずに身体で感じる人もいる。神のいうことがわかる能力を生れながらにもっている者がおり、そのような者がニガインマとなる。そして、そのような人はツカサンマに選ばれる可能性が高い。

４．マウカン

子供が生まれるとムヌスンマに依頼して、その子のマウカンを定めてもらう。マウカンはその子の守護神であり、神になった祖先のなかの1人がマウカンになる。

家にマウカンを拝む棚を設けている人もいて、月初めの1日に酒を供える。正月などには簡単な供え物をする。マウカンには線香をあげないという話もあるが、自分のマウカンを祀る棚に、月の1日と15日にお茶、線香をあげている人もいた。

神ニガイをする際、自分のマウカンとなっている祖先を祀っている家にも供え物を持っていく。母親が子供のマウカンに供え物を持っていく。母親が供え物を持っていくので、子供は自分のマウカンを知らないことが多く、母からも教えてもらわないことが多い。マウカンとなっている祖先を祀っていた家を継ぐ人がいなくなり、その家に人が住まなくなっても供え物は持っていく。

話者Aのマウカンは、母親の祖母のおじさんであり、そのことは祖母から聞いた。話者Bのマウカンは父である。Bの父はBが生まれたときには生きていたが、早く亡くなった。子供が生まれたときには生存していても、早く亡くなった人ならマウカンになることができる。話者Cは母が早く亡くなったため、マウカンを知らされていない。Cの子供のマウカンは、Cの夫の実家の祖父である。モトムラのカカランマを務めたことのある話者Dのマウカンは父の弟で、40歳代で亡くなった人である。Dの4人の子供もマウカンを持っており、それはDの実家の祖先である。

５．若干の考察

以上、伊良部島佐良浜でみられる女性民間宗教者について紹介した。佐良浜地域全体を対象とする宗教行事を担当するのはツカサンマであり、ツカサンマはフンマ、ナカンマ、カカリャンマで構成される。佐良浜にはサトとよばれる小規模地域社会が存在し、それぞれのサトが祀る拝所（サトガン）での祭祀を担当するのはダツンマとよばれる女性である。さらには、各家や個人に依頼されて祈願などを行なう女性もおり、彼女たちはムヌスンマ（もしくはカンニガイオバア）とよばれる。このように佐良浜の女性民間宗教者は、ツカサンマ（フンマ、ナカンマ、カカランマ）、ダツンマ、ムヌスンマの3種類に整理することができる。なお、ツカサンマのうちカカランマと、ダツンマ、それにムヌスンマは神に願い（ニガイ）を捧げるところから、ニガインマともよばれる。

既述のように櫻井徳太郎は、地域社会での公的な祭祀を担当する祭司で、神霊に憑依されることのないノロ（もしくはツカサ）と、神霊に憑依されて個人的な依頼事に応じるシャーマンであるユタ（もしくはカンカカリャ）とについて、初期の段階では両者は未分化であったとしている。その証拠として、沖縄の周辺離島では、ノロとともに地域社会の公的祭祀に参加する「下級のカミンチュ」（ノロよりも地位の低い祭司）のなかに、神霊に憑依され、各家での祈願や個人的な依頼事に応じる者がいることをあげている。

これに対して赤嶺政信は、シャーマン的性格をもつ職能者が地域社会の公的な祭祀組織に組み込まれている状況に関して、先ずは、そのシャーマン的性格をもつ職能者が公的な祭祀組織のなかで占める位置や役割を、祭祀の内容や儀礼過程の脈絡のなかで、もしくは他の祭司との関係において把握することが重要であり、そのうえで相互の事例の比較研究をすることが、ノロとユタとの関係の解明についてより有益であるとしていることも先述した。

本稿で紹介した佐良浜の民間宗教職能者のうち、ツカサンマの一員であるカカランマも、 櫻井によって、ノロ（ツカサ）やユタ（カンカカリャ）との関係を考察する際の「下級のカミンチュ」の例としてとりあげている。ここでは、シャーマン的性格をもつ職能者が公的な祭祀組織のなかで占める位置や役割を、祭祀の内容や儀礼過程の脈絡のなかで、もしくは他の祭司との関係において把握すべきであるという赤嶺の提言に少しでも近づく試みとして、筆者が聞き取り調査した宗教職能者の事例を通じて、佐良浜における祭司（プリースト）とシャーマンとのかかわりを検討してみたい。

検討に先立って、佐良浜の宗教職能者に関する櫻井の報告を確認しておく。 櫻井は自身の報告を 17970 年の調査によるものとしているが、櫻井が報告する内容は次のようである。

《佐良浜は池間添と前里添という 2 つの区域に分かれ、双方の地域からツカサ（ツカサンマ：筆者注）とよばれるカミンチュが出ている。カミンチュのなかで一番中心的な役割を果たすのがオーンマまたはウフンマ（ウンマ：筆者注）であり、次にそれを補佐するナカンマ、その下にカカリャンマ（カカランマ：筆者注）と称する神女がつく。カカリャンマとは、神がかる婦人という意味である。その下にまた、祭場の清掃をしたり神霊に供える神饌をつくったりするニガインマがいる。ニガインマとは神願いをする女性という意味であり、佐良浜の女性は一定の年齢に達すると、誰もがニガインマになる。そして、そのなかから神がかりするカカリャンマが出現するのである。

すなわち 47 歳になると佐良浜のすべての女性が集合して、クジ（ユルフズ、揺り籤）を引く。クジによってそれぞれの役割が決定する。これらの神役に当たった人がニガインマとよばれる。最高の拝所であるウハルズ（大主御嶽：筆者注）での共同体祭祀で諸役を担うことになる。そのほかの拝所でもニガインマは宗教儀礼を執行する。豊年を祈願したり、流行病が蔓延したりするとき、上述のカミンチュ、ニガインマたちが行列をつくって御嶽廻りを執行する。

ツカサ（ウンマのことか：筆者注）、ナカンマとよばれる最高級の女性神役は、祭司として祭祀執行に中心的役割を担うのみで、絶対に神がかりはしない。いわゆるシャーマン的な機能を果たすことはない。しかしカカリャンマは、一方では佐良浜での公共性をもつ祭りのときに最高神女のツカサ、ナカンマを補佐して神事に携わる。また一方では私的な巫呪的職能に従事する。私的な神願い、つまり祈願・祈祷、卜占、ときには死者の口寄せなどにいたるまで、その中心的役割を果たすのがカカリャンマである。それはまたモノシンマ（ムヌスンマ：筆者注）ともよばれる。カカリャンマ、ムヌスンマにとっては、自分が担当している家というものが固定している。そういう固着的関係が成立したときにカカリャンマ、ムヌスンマはまた、ヤーダスあるいはヤージャスとよばれる。

これらのカミンチュは、今でこそクジ引きによって選ばれるが、往昔はそうではなく、やはり神霊ののりうつり、つまり神がかりによって決められたものと思われる。神がのりうつって巫呪的行為をする人たちがカカリャンマといわれるわけであろうから、それはまさしくシャーマンだということが明らかとなってこよう。このムヌスマは個人のニガイという私的な領域を中心に展開している。人の死後に供養のために行なわれるタマスウカビも実施し、そのさいクチヨセも行なう。カカリャンマが死者に代わって口語る。》（〔櫻井 1987:213-218〕より、筆者が要約した。）

以上が、櫻井の報告する佐良浜の宗教職能者に関する内容である。櫻井は、それら宗教職能者のなかでカカランマを、地域社会の公的祭祀を担当する祭司の性格と、個人的な依頼事に応じるシャーマンの性格を併せもつ「下級のカミンチュ」の例として注目し、初期の段階では公的祭祀を担当する祭司の性格をもつ宗教者と個人の依頼事に応じるシャーマンの性格をもつ宗教者とは未分化であったことを示す事例としている。

上記の櫻井の報告には、筆者が聞き取り調査した内容と比べると相違する点もある。先ず櫻井は、佐良浜の女性は誰でも一定の年齢に達するとニガインマになり、カカランマの下にあって祭場の掃除や供物の用意を行ない、大主御嶽の祭祀で諸役を担当すると述べる。

本稿で紹介した筆者の聞き取りによれば、神への願い（ニガイ）を行なう者がニガインマであり、カカランマ、ダツンマ、ムヌスンマのいずれもがニガインマである。そして、旧暦 9 月に豊穣や幸福を願って行なわれる祭事ユークイでは 47 歳から 57 歳までの女性は誰でもツカサンマともに大主御嶽に籠ることができるが、大主御嶽に籠る女性はユークインマとよばれる。大主御嶽での籠りの後、佐良浜の各ウタキや拝所をツカサンマとともにめぐって祈願をするのは、このユークインマである。

また櫻井の報告では、ツカサンマのなかで一番下に位置するカカランマ（櫻井はカカリャンマと表記する）は、ウンマ（櫻井はツカサと記す）やナカンマとともにウタキの祭祀に参加するが、各家での祈願や個人からの依頼事にも応じ、死者供養のためのタマスウカビも行なって死者の口寄せも実施する。このような事柄も果たすカカランマはムヌスンマ（櫻井はモノシンマとも記す）とも称される、という。

櫻井はカカランマを「下級のカミンチュ」の事例とするが、赤嶺によれば、ウンマが最高位で、その次がカカリャンマ（カカランマ）、ナカンマの順になるという〔赤嶺 1997:159〕。

筆者の聞き取りによれば、カカランマは佐良浜の公的祭祀を担当するツカサンマの一員であり、ダツンマが行なう小規模地

域での祭祀（サトガンの祭祀）や、ムヌスンマが行なう各家での祈願や私的な依頼事にはかかわらない。ダツンマやムヌスンマとは、いわば「位が違う」のである。カカランマが各家や個人の依頼事に応じるのは、カカランマの任期を終えてからのことである。

以上のような櫻井が報告する内容と筆者が聞き取った内容との相違は、調査時期の違いによるものかもしれず、または筆者の調査が不十分なことに由来するものかもしれない。しかし筆者の現段階での調査から、佐良浜の宗教職能者の相互関係について整理するならば、以下のようになるであろう。

櫻井が「下級のカミンチュ」として注目したカカランマは、ウンマ、ナカンマとともに佐良浜の公的祭祀を司祭するツカサンマの一員である。

事例で紹介したように、カカランマを務めたBは、神や祖先に捧げる歌である「オヨシを唄っていると、唄っている声が自分の声でなくなることがある。祖先が自ら歌っているのだと思う。最初は自分の声だが、しばらくして気がぼんやりしてくると、自分の声ではない声で唄っているのがわかる。オヨシを捧げている家の祖先が唄っているのだとわかる」と述べていた。このような発言からカカランマたちは、祭事において神や祖先が自分たちに憑依し、憑依した神や祖先がカカランマの口を通して唄うという考え方、感じ方をもっているのではないかと考えられる[4]。ツカサンマは、神霊に憑依される公的祭祀担当者といえそうである。

ツカサンマが地域の公的祭祀を担当するのに対して、佐良浜で個人的な依頼事に応じているのはムヌスンマ（もしくはカンニガイオバア）とよばれる女性である。ムヌスンマは、カカランマが唄う歌以外の歌を唄って各家や個人のために神ニガイをしたり、占いなどの依頼事に応じたりする。ムヌスンマが唄う神ニガイの歌は、一般の人でも覚えれば唄えるという。

神ニガイの歌が唄える人がムヌスンマになるのではなく、ムヌスンマになるのは、神から与えられた能力をもつ人々である。ムヌスンマは神の姿を見たり、神の声を聞いたりするという。またタマスウカビでは、死者の言葉を代弁して遺族に伝えるという。このような能力、すなわち神や死者と直接交流する能力をもつムヌスンマはシャーマンであり、沖縄本島でのユタに相当する職能者といえる。ムヌスンマは、当人だけでなく、先祖代々神とかかわることをしてきた人々であるという。

地域の公的祭祀を担当するツカサンマ（ウンマ、ナカンマ、カカランマ）はクジで選ばれるが、事例で紹介したCのように、以前から霊的な交流ができる能力をもっていた者が神に願って、ツカサンマに選ばれることを延期してもらうこともある。またツカサンマには、なぜか必ず先祖のなかにムヌスンマやツカサンマをしていた人のいる者が選ばれるともいう[5]。なお事例でも紹介したように、ツカサンマのうちカカランマはオヨシや神歌を通じて神と交流するが、カカランマだけが神と交流するわけではなく、ウンマとナカンマも神と交流できる能力があるともされる。

さらには事例で紹介したCのように、ツカサンマ（カカランマ）を引退した後、ムヌスンマの役割をはじめる者がいる。ツカサンマのうちナカンマも引退後、ムヌスンマをしてもかまわないが、ウンマはツカサンマのなかの最高位であるため、神と交流できる能力があっても、ムヌスンマの役割をしてはならないということである。

以上のような内容に基づけば、佐良浜の女性のなかから神や祖先と交流できる能力をもつムヌスンマ（カンニガイオバア）があらわれ、クジで選ばれるとはいえ、そのような神や祖先と交流できる能力をもつ女性のなからツカサンマが選ばれるという考えを佐良浜の人々はもっているといえそうである。そしてツカサンマ（カカランマ、ナカンマ）を務めた者は、 引退後、ムヌスンマになる者もいるということのようである。

すなわち佐良浜では、神と交流できる能力をもつ者がいるという考えが底流にあり、そのような神と交流できる能力をもつ者が職能者としてのムヌスンマになったり、ツカサンマに選ばれたりするという考え方があるといえそうである。そしてツカサンマを務めた者が、ツカサンマの最高位であるウンマを務めた者を除いて、ツカサンマを引退した後にムヌスンマの役割を務めるたりもするということのようである。

このような状況は、筆者が行なった現時点での聞き取り調査をもとにしたものであり、それを時間的に遡及させて、地域の公的祭祀を担当する宗教者と個人の依頼事に応じる宗教者とは、初期の段階においては未分化であったという櫻井の主張を補足する資料になりえるか否かについての検討は、ここでは差し控える。ただ、本稿で紹介した事例を通じて、現在の佐良浜の人々は宗教職能者に関して以上のような考え方をしているのではないか、という見方を提出することは可能であろう。

６．おわりに

[4] 茂木は、カカランマの「カカラ」は「憑り」で、カカランマ（憑り母）は神と交信する役であるという〔茂木 2014:17〕。また「「オヨシ」と呼ばれる神と交信する歌は「カカランマ」だけが歌い、（中略）一般の人は聞くことも出来ない。オヨシは 12 曲あり、それぞれ歌声が変わるという。佐良浜のカカランマは、神の声が聞こえ一緒に歌うとも、神が入って歌っているのだとも言う」とも報告している〔茂木 2014:17〕。

[5] 赤嶺は、「筆者の佐良浜でのカカリャンマについての調査においても、すでにカンカカリャとしての職能を果たしている女性がカカリャンマに就任するしきたりであったことが確認できた」という〔赤嶺 1997:149〕。

本稿では、櫻井徳太郎が沖縄のノロとユタの初期段階での未分化を論じた際に事例の1つとしてとりあげた伊良部島佐良浜での民間宗教職能者について、筆者が聞き取り調査した事例を報告した。筆者が調査した事例から、佐良浜に人々の間には、神と交流できる能力をもつ者がいるという考えが底流にあり、そのような能力をもった者のなかから、個人的な依頼事に応じるシャーマン的な宗教職能者（ムヌスンマ）があらわれたり、地域の公的な祭祀を担当する祭司としての宗教職能者（ツカサンマ）が選ばれたりするという考え方があるといえそうである。そしてツカサンマの務めを終えた者のなかには、ムヌスンマとして活動する者もいる。

このような佐良浜の人々がもつ考えを、宗教職能者の初期の段階という時代にまで遡及させてノロ（地域の公的祭祀を担当する祭司）とユタ（個人の依頼事に応じるシャーマン）との関係を考察する資料として扱うことができるか否かということについては、また別の問題として本稿では検討を差し控えた。

ノロとユタとの関係を考察するためには、赤嶺がいうように「個々の状況が単純でないことは十分予想される」ため〔赤嶺1997:157〕、櫻井が事例としてあげている他の地域の状況をさらに検討することも必要であろう。

謝辞

本稿で紹介した内容は、平成26年2月16日～2月19日、同9月4日～9月8日、平成27年3月16日～3月19日、同11月6日～11月9日に佐良浜で行なった聞き取り調査によるものです。調査にご協力いただいた仲間明典先生、與儀千代美さん、長崎国枝さん、上原敏美さんに感謝申しあげます。なお本稿の文責はすべて筆者にあります。

引用文献

赤嶺政信　1997　「ノロとユタ」赤田光男・小松和彦編『神と霊魂の民俗』（講座日本の民俗学7）雄山閣
伊良部村役場　1978　『伊良部村史』
櫻井徳太郎　1987　『東アジアの民俗宗教』（櫻井徳太郎著作集7）吉川弘文館
佐々木宏幹　1980　『シャーマニズム』（中公新書）中央公論社
　　1984　『シャーマニズムの人類学』弘文堂
平良市教育委員会　1994　『平良市史第9巻資料編7（御嶽編）』
茂木仁史　2014　「第一部　宮古の神歌　解説」『華風』11月号（国立劇場おきなわステージガイド）公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団

（提出日　平成28年1月6日）